巻頭言

街角をつくる建築：人と建築の関係を豊かに語ること

鈴木 毅

キーワードは「街角」ではないかと考えるようになった。

街角を生み出している建築とそうでない建築の違いに皆が気づきはじめ、街角をつくることのできる設計者とそうでない設計者が、はっきり区別されつつあるように感じるのである。

本稿は、建築計画・環境行動研究（以前は環境心理と言った）を専門とし、人と建築、人と場所の関係、建築・都市デザインについて考える立場（コウモリ的な立場だ）から、近年の建築や街とそのつくられ方について、「街角」という言葉を手がかりに論じる試みである。

▌出町桝形商店街 DELTA

京都の出町桝形商店街の中央に、京都国際写真祭「KYOTOGRAPHIE」の拠点、DELTAがある。DELTAのカフェに座ってコーヒーやワインを飲みながら、アーケードに掛かっている写真作品や、様々な人が行き交う通りの様子を眺めていると全く飽きない。活気ある日本の商店街はヨーロッパの街路に劣らず魅力的なのに、その様子をじっと眺められる場はあまりなかったことに気づかされる。

今年で10年目を迎えたKYOTOGRAPHIEは、京都の街を巡りながら、町家、寺院、旧議場など、普通はアート展示には使われない様々な場所を使って、展示デザインを建築家に依頼。あまり見る機会のなかった巨匠から、若いアフリカの写真家まで、多くの写真を展示して楽しませてくれる（普通の美術館で写真を鑑賞することが物足りなくなったという弊害もある）。

KYOTOGRAPHIEは京都の街の空間や風景とともに味わう写真祭として定着し、今や京都に住む楽しみの一つになりつつあるが、DELTAという京都の商店街を見守ることのできる街角をつくってくれたことも、市民や来訪者にとって大きなプレゼントである。ちなみに、これまでの展示の中で個人的に一番印象的で記憶に残っているのは、京都市中央市場で働く人達の全身写真を界隈の壁面に実物大で並べた「THE HATARAKIMONO PROJECT」である。これもまた街角であった。

▌街角をつくる建築

京都には建築家が関わった街角も増えている。自転車屋の半分をリノベーションした「ブルーボトルコーヒー京都六角カフェ」（長坂常／スキーマ建築計画）は、コーヒーに並ぶ人、自転車屋で話をする人で小さな人だまりができ、お隣の八百一本店（KAJIMA DESIGN）前のスペースと連鎖した魅力的な街角を形成している。また、隈研吾氏による新風館も中庭だけでなく、東洞院通側にも、エースホテルの入り口が面する姉小路通側にも街角を生み出している（向いの亀末廣が眺められるのが良い）。コロナで遠出が難しい状況の中で、近所にこのような街角ができたことは生活者として大変ありがたかった。そう、生活者にとっては、建築そのものの価値よりも、そこで何ができるか、歩いていて一休みしたり、他者を見守って楽しめる、場合によっては小さな会話が生まれる街角が重要なのである。私に限らず普通の人が日々体験・認識し、豊かさを感じているのは建築空間や街並みではなく「街角」ではないだろうか。

▌建築内外の街角

街角は外部空間とは限らない。たとえば青木淳氏・西澤徹夫氏によってリノベーションされた「京都市美術館」の中央ホール。以前からあったような正面のスロープからガラスリボンの中央の入り口を通り、時間が淀んでいるようなチケット売り場を抜けて上がったところの中央ホールは、単に東西の動線を通しただけでなく、これまた前からあったように見える新設された階段まわりが、待ち合わせたり、佇んだり、プロアマ問わない写真撮影のメッカであり、街角のようである。

少し強引かもしれないが、2021年度のJIA優秀建築賞に選出された2作品「熊本城特別見学通路」（塚川 譲、堀 駿／日本設計）、「新富士のホスピス」（山﨑健太郎／山﨑健太郎デザインワークショップ）の魅力も、共に「街角」をつくり出していることと言えないだろうか。

「熊本城特別見学通路」は注意深い調査と高度な技術によってデザインされた見学通路を歩むにつれ、震災の実態と復興の大変さを認識・共有するとともに、自分の好きな場所でこれまで見ることのできなかった角度や高さから熊本城を味わうことができる。単なる通路というより、新たな街角の視点場を提供していると言えないか。

「新富士のホスピス」は、ゆったりした回廊を歩く時、小さな庭の樹木や植栽や誰かに出会う小さな旅ができそうである。実際、腸に穴が開いて、食欲がわかなかった居住者

がリビングにご飯を食べに行くようになった。椿のつぼみが大きくなるのを日々カメラにおさめるなど、ここで過ごす一人ひとりの物語が生まれている(そして元気になり、家に戻った人も少なくないという)。

福祉・高齢者施設において「病院モデル」から「住宅モデル」への転換が唱えられて久しい。方向性は正しいと思うが、『新富士のホスピス』の状況を伺うと、人間がいきいきと生きるためには「住宅(個室)」だけでは不十分で、たとえ小さくても制限されたものであっても、自分のペースで自由に歩いて好きなところに座り、他者や自然の変化に出会える「街と街角」が必要なのではないかと思えてくるのである。

「街角」は「街並み」や「にぎわい」とイコールではない

念のため確認しておきたいのは、街角は街並みとは違うことだ。もちろん地域の歴史や周辺建物の形式など、コンテクストを配慮するのは建築の基本的なマナーである。京都にも、もう少し早くからコントロールできなかったのかという風景は多い、というかほとんどである。

しかし、整った街並みが魅力ある街角になるわけではない。むしろそうでない場合が多いのではないか。街区型を謳った再開発によってできた、整然としているが死んだような寂しい街路の街を我々は幾つも知っている。また歴史的街並みの保全を目指す時、誘導の結果、過去には一度も存在しなかった架空の書割りのような街並みになった例を見たことがないだろうか(色々な時代の建物が存在するのが街並みである)。生きた街角は街並みの制御だけでは絶対に足りないのである。

かといって、街角に必要なのは「にぎわい」でないことも強調しておきたい。実は私は街や地域の「にぎわい」を主目標とする計画やデザインを仮想敵と考えている。もちろん、疲弊する街や地方都市、シャッター商店街の危機的な状況を見て、地域をなんとかしたいというのはわかる。時にハレの「にぎわい」はあっていい。しかし「にぎわい」は往々にして個人を埋没させる。重要なのは一人ひとりが主人公になれるような日常の豊かさである。「にぎわい」だけを目標にすると、イベント時以外は死んだ街になってしまう。

街角に大勢の人は必要ない。そこで会話する二人だけでも構わない。一人で佇んでいるだけでもいい。そこでたま

出町桝形商店街の街角
Street corner of Demachi Masugata Shopping Street
KYOTOGRAPHIEのPermanent SpaceであるDELTAのカフェからの風景。様々な人が行き交う。アーケードに掛かるのはプリンス・ジャスィの作品「いろいろ アクラ-キョウト」
View from the café of DELTA, KYOTOGRAPHIE's permanent space. A variety of people come and go here. Hanging in the arcade is a work by Prince Gyasi (entitled "Iro Iro Accra-Kyoto")

京都市美術館中央ホール
Central Hall of the Kyoto City KYOCERA Museum of Art
ホールは東西を繋いだだけでなく、新設された(が前からあったように見える)階段のまわりはあたかも街角。インスタからVogueなどファッション雑誌まで定番の撮影スポット
The hall is not just a link between the east and west, but the area around the newly installed stairway (which looks like it has been there from before) also seems as if it were a "street corner." This is a classic photographic spot for Instagram and fashion magazines such as Vogue

千里ニュータウン新千里東町竹林
Bamboo grove in Senri New Town Shinsenri Higashimachi
ひがしまち街角広場主催の最後の竹林整備の日。街角広場から生まれた「千里竹の会」のサポートによる市民の自主的な整備(筍掘り)。手前はディスカバー千里が制作した街角広場を紹介する大きな本
The day of the creation of the bamboo grove, the last event by Higashimachi Machikado Hiroba. This is a voluntary development (digging of bamboo shoots) by the public with support from Senri Take-no-Kai, a group formed in Machikado Hiroba. In the front is a large book introducing Machikado Hiroba, produced by Discover Senri

写真:鈴木 毅
Photo : Takeshi Suzuki

たま出会ったシーンをエピソードにして、誰かに話したくなったりするだけでいい。極端に言えば、誰もいなくても良い。誰かが来そうな雰囲気、何かが起こりそうな気配だけで十分街角になりえる。

人の居る場面・状況の質と魅力をダイレクトに扱う概念として、居方(いかた)と言い出してほぼ30年になる。居方は研究的には「どこで誰が何をしているか」を基本データとする、建築計画の基本分析手法から抜け落ちるもの、端的に言えば風景や場面を扱うための方法論と位置づけられるが、同時に都市の公共空間を計画・デザインする時の、「にぎわい」以外の目標、人の居る状態を表現する言葉を増やすことが目的でもあった。これまで集めてきた「思い思い」「佇む」「居合わせる」などの居方のヴォキャブラリーは、今考えると街角的な場所のための言葉が多かったことに今更ながら気づいた。

▌街角を形成するもの

街角は別に新しい概念ではない。都市の価値を論じた古典であるJ.ジェイコブズの『アメリカ大都市の死と生』はもちろん、計画的につくられた都市に対し、皆が漠然と感じていたつまらなさを数学的に論証・説明してくれた、C.アレグザンダーの『都市はツリーではない』も、ツリーではないセミ・ラティス概念を説明する例としてバークレイの街角を使っていた。

また街角をつくる建物の実例として槇文彦先生の「代官山ヒルサイドテラス」を思い出さない人はいないだろう。やはり槇先生の「スパイラル」も、青山通りを見下ろすエスプラナードやステージ的なギャラリーなど、内部のあちこちに街角がある建築とも言える(居方研究のきっかけとなった場所でもある)。

ジェイコブズがいう街路の価値、アレグザンダーのセミ・ラティス構造に真っ向から反対する人はあまりいないだろう。ヒルサイドテラスの魅力を認めない人もまずいないだろう。しかし、いざ現実の街を見ると、整っているがとっつきにくい街並みが量産されている。また街並みと心理の関係を扱う調査研究も、その精度が上がるほど、リアルな街角の質から離れていくように感じる。

何が街角を形成するのか(しないのか)について、まだはっきりとした結論はないが、幾つか言えることはある。

▌街角には「主(あるじ)」が欲しい

まず主(あるじ)がいたほうが街角になりやすいと思う。主とはその施設・場所を、責任をもって仕切り、運営している人のことである。本部の意向を確かめないと判断ができないフランチャイズの店長は主ではない。司書のいない図書室など、主のいない建築や場所は多くの場合死んでいる。公共施設がつまらないのは、館長が専門性をもった主でない場合が多いことが原因ではないかと思う。

DELTAにはパリのカフェのギャルソンを思い出させる店員さんがいて、親切に柔軟に対応してくれる。街角も見守っている彼は主である。ブルーボトルコーヒー京都六角カフェにはカフェの店員さんだけでなく、数年前に自転車店を継いだ若い店主がいて、自転車を一度直してもらっただけなのに店の前を通るたびに挨拶してくれる。彼もまたこの街角のキーパーソンであり主だ。

▌当事者による「まちの居場所」

主という概念について考えるようになったきっかけは、千里ニュータウン新千里東町の近隣センターの空き店舗を利用したコミュニティカフェ「ひがしまち街角広場」である。ふらっと入れてお気持ち料100円でお茶を飲め(飲まなくてもいい)、おしゃべりからまちづくりまで様々な情報交換ができ、複数の地域団体の孵化器となる場所(私が共同代表をつとめるディスカバー千里もここで生まれた)は目から鱗だった。千里に住み始めた時からこういう場所が欲しかったと語る赤井直さんは、主として自らの理念とビジョンと柔軟な運営で、専門家がつくらなかったが街に必要な場所を生み出した。赤井さんが代表を退いたあともその基本方針は継続されてきた。

コミュニティカフェの名称には「〜の家」などの家系と、「〜広場」などの公共スペース系があるが、ひがしまち街角広場は、公共スペース系でかつ街角を名乗っている。実際、街角広場は、千里ニュータウン後半の開発の特徴である歩行者専用路に面しており、子ども達は対面にある小学校から全く自動車に出会わずに街角広場に道草し、その前で安心して遊ぶことができた。名実ともに街角を提供していたのである(街角広場については田中康裕氏による著書を参照されたい)。

コミュニティカフェに限らず、院内助産所、障がい者児童

デイ、私設図書館など、専門家ではなく、切実な問題意識とビジョンをもった個人が当事者として場をつくり出す例が増えている。我々が「まちの居場所」と呼ぶこれらの小さな場は公共施設ではないが公共性をもち、多くの場合当事者が主の役割を果たしている。

「使う人の立場から考える」というのは建築計画研究の重要なポリシーであるが、今にして思うと、人には新しい場をつくり出す能力があるのに、利用者に留めてきてしまっていたのではないかという疑問が湧いてくる。

実際、最近これは行きたいと関心をもって見学したり、調査で訪れたりする場所・建築は、民間によるもの、NPO的なグループや個人が工夫して運営しているものが多くなっている。以前は国のモデル事業とか、大学の先生に指導を受けた公共住宅とか、公共によるプロジェクトがほとんどだったのに比べて大きな変化である。

なお先にあげたKYOTOGRAPHIEは、団体組織や委員会等ではなく、写真家ルシール・レイボーズさんと照明家・仲西祐介さんによるプロジェクトである(しかもお二人は元々京都在住ではなく、東日本大震災をきっかけに京都で出会って始まったのだ)。京都の事例ばかりで恐縮だが、従来ほとんど紹介されてこなかった万博の学術人類館に光をあてた民博顔負けの展覧会「イッツ・ア・スモールワールド:帝国の祭典と人間の展示」も小原真史氏という個人による企画であった。展覧会においてもビジョンのある個人の活動が公共をしのぐ場合が出てきているのである。あきらかに個人が公共の一部を担いつつある。

公共施設を設計するのが建築家という考え方があるが、当事者が小さな公共の場をつくり始めた今、それにどう対応するかが問われているように思う。プログラムは当事者にまかせてハードのデザインに徹する方向ももちろんあるが、一方で、パン屋を経営する建築家、自宅の一階を公衆浴場にする構造設計者、事務所にみんなの図書館をつくる建築家など、若い世代を中心に、自らが当事者として場を生み出す方向も確実に現れている。

■おわりに

実はこの5月でひがしまち街角広場は活動を終了した。地域にはどんな場所が必要か、場所の運営はどうあるべきか、研究者と実践者にたくさんのことを教えてくれた場がなくなるのは残念でならない(ひがしまち街角広場だけで何本の研究論文が書かれたことか)。さらに残念なのは、ひがしまち街角広場の生み出したものや価値が、新設される地域施設に引き継がれていないことである。

建替えによって近隣センターは分解され、整っているが寂しい街並みと、街角のない建物に押し込まれることになった。喫茶ランドリーの田中元子氏の「1階づくりはまちづくり」というこの上なくわかりやすいキャッチフレーズも豊中市には届いていないようである(面積や高さや色など、数値にできるものでないと理解できないらしい)。

冒頭でコウモリのような立場と書いたのは、専門家(研究者)、計画デザイン者、そして生活者という三つの立場の中間ということである。今回は生活者としての立場が強い内容になった気がする。今後は専門家、計画デザインの立場から、街角広場と街角の価値について、行政をはじめとする頭の固い人々も説得できるように語っていきたい。

参考文献)
田中康裕『まちの居場所、施設ではなく。』(水曜社、2019)
田中康裕『わたしの居場所、このまちの。』(水曜社、2021)
鈴木 毅「人の居方からの環境デザイン」/『建築技術』、1993-95
鈴木 毅「当事者による場づくりの時代」/『まちの居場所』(鹿島出版会、2019)
鈴木 毅「建築計画の前提の再検討 一人間・環境系モデルを中心に」/『人間・環境系からみる建築計画研究(足立孝先生生誕百周年記念論文集)』(デザインエッグ社、2019)

■鈴木 毅
近畿大学建築学部教授
愛知県豊橋市生まれ。1980年東京大学工学部建築学科卒業、同大学院博士課程単位取得退学。東京大学助手、大阪大学准教授を経て現職。専門は建築計画、環境行動デザイン。特に「人の居方からの環境デザイン」「当事者による場づくり」「生態幾何学による建築デザイン」。共著に『建築計画読本』(大阪大学出版会)、『まちの居場所』(鹿島出版会)、『人間・環境系からみる建築計画研究(足立孝先生生誕百周年記念論文集)』(デザインエッグ社)。千里ニュータウン研究・情報センター(ディスカバー千里)共同代表